

26P-am232

頭皮紅斑と異常毛根との関連性

○丸橋 佑基¹, 神谷 江美¹, 佐倉 正明¹, 丹羽 正直¹(¹ホーユー)

【目的】30年前と比べ近年、日本人の洗髪頻度は増加しており、頭皮環境に変化が起きていることが考えられる。そこで我々は以前より頭皮の目視観察を行っている。その結果として、頭皮に紅斑が認められる多くの例を確認してきた。一方、頭皮環境に変化が起こることで頭髪への変化も予想される。本報告では、頭皮と頭髪との関連性を捉えることにより、健やかな頭髪を保つための要素を明らかにできるのではないかと考え、頭皮の紅斑と異常毛根との関連性を調べた。

【方法】20～39歳の被験者に対して頭皮の目視観察を行い、頭皮の紅斑面積をスコア化し分類した。その中で紅斑スコアが分散するように被験者を選出し、選出した被験者に対して1日1回、3日間洗髪を行った。洗髪による脱落毛根を排水溝に設置したガーゼにて回収した。回収した脱落毛根をスライドガラス上に貼り付け、マイクロスコープを用いて一人あたり平均350本程度観察し、正常毛根と未角化物付着毛根とに分類した。脱落毛根中の未角化物付着毛根本数の割合を3日間の平均値として算出した。

【結果・考察】頭皮の目視観察の結果、多くの方で頭皮に紅斑が認められた。また、頭皮の目視観察の結果より選出した被験者を洗髪した結果、頭皮の紅斑面積の増加とともに脱落毛根中の未角化物付着毛根の割合が増加した。未角化物付着毛根は休止期毛性脱毛症で認められる毛根像であることから、頭皮の紅斑面積が拡大することで脱毛が生じやすい状態にあることが示唆された。